



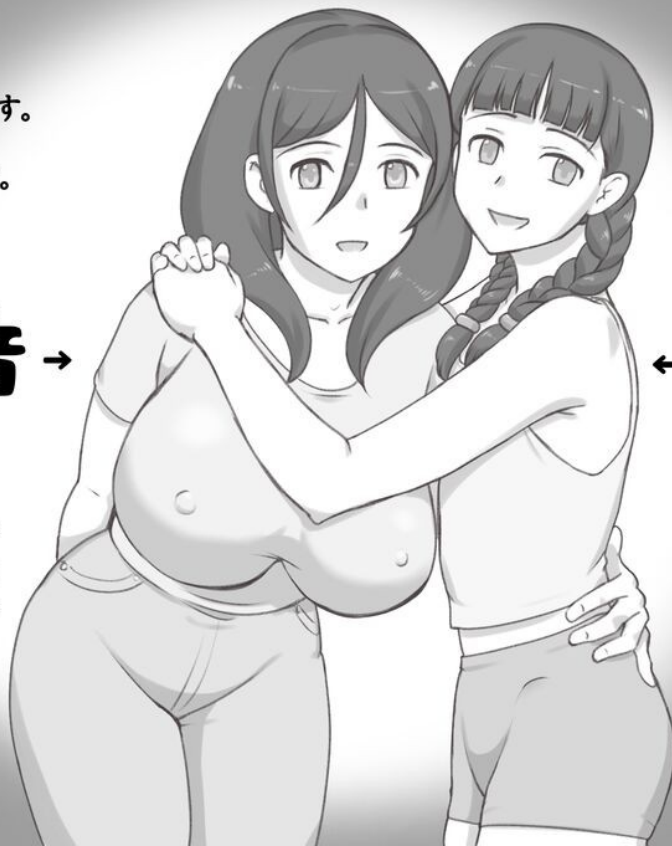
## 『母乳分泌過多症』

…ってご存知ですか？

そう、子供が乳離れした後も  
お乳が勝手に出てしまう症状です。  
おっぱいがパンパンに張って  
雌牛のようになってしまいます。

かのん  
**歌音** →

バツイチママさん。  
娘の歌恋と母子家庭。  
大きな胸にたがわず  
包容力があり  
娘に甘い♡



今日は、そんなオッパイを  
持つ母親が、どうして娘と  
恋仲になったのか、その  
顛末をお話ししましょう…♡

かれん  
**歌恋** ←

歌音の娘。  
物心ついてから母親にベッタリ。  
恋愛に憧れるものの奥手。  
いつか母親のような  
胸になりたい♡

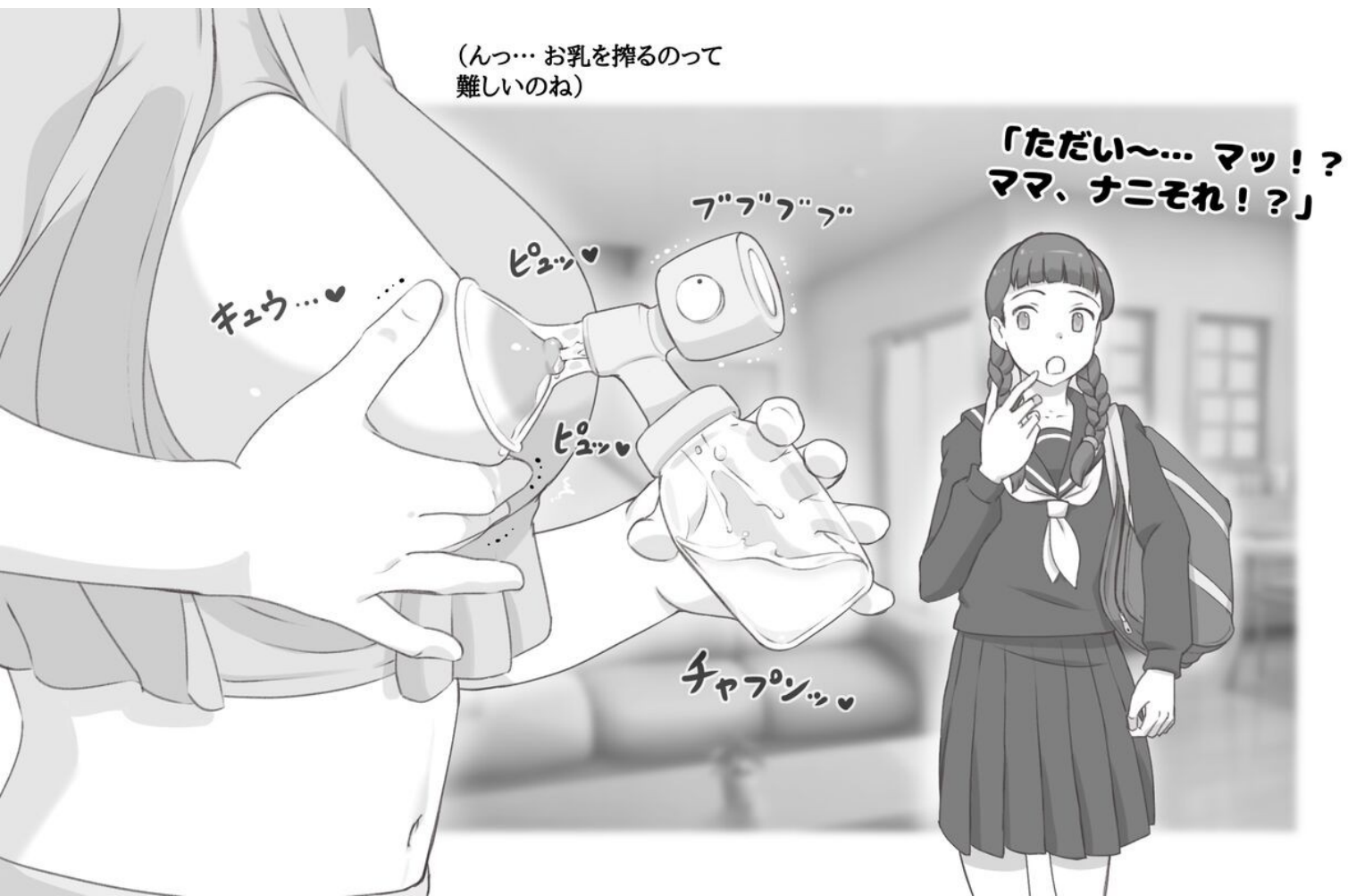
「…『プロラクチン分泌異常症?』」  
聞き慣れない言葉に  
歌音さんは戸惑いました。

最近、お乳が痛いほど  
張るので違和感を  
覚え、産婦人科を  
訪れたのです。

「ええ。あなたは先天的に  
母乳過多になりやすい  
体質ですね」

「あの、それではどうしたら…  
難しい病気でしょうか」  
「いえいえ、そんなに心配する  
ことはないですよ。  
母乳をこまめに搾って  
おけば大丈夫。  
搾乳器をお出し  
しますね」







「あ…お、おかえりなさい。  
恥ずかしいとこ、見られちゃったかな…」

「へーっ、プロラクチン分…なんとか  
っていうんだ。ママも大変だね」

うふふ

カア…

ジッ

キュッ♡

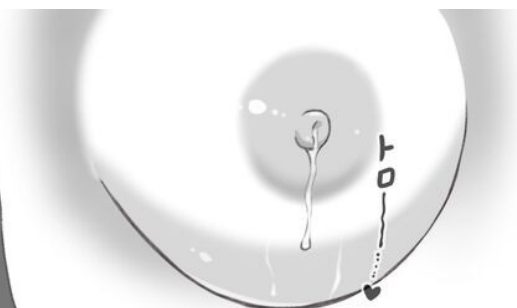
キュッ♡

歌恋ちゃんは  
ママの乳首を  
見つめていると  
ふいにお乳が  
吸いなくなり  
ました。

(このオツパイ  
おいしそう…)

ゴウ…♡

なんだかムズムズして  
くるのです。



「...お乳を吸いたいの??」

ええ!?



歌恋ちゃんの申し出に  
ママさんは目をパチクリ。

「赤ちゃんの時以来だし、  
ひさしぶりに飲んでみたい  
なあ〜つて♥  
ねえ〜ん、いいでしょー？」

(小さい子供じゃないのに...)  
とは思うものの、娘に頼まれ  
たら嫌とは言えない歌音さん。

「じゃ、じゃあ...どうぞ」

「あ〜ん♥」

雛が餌を求めるように突き出されたお口へ  
母乳が注がれました。

キュツ、キュツ、と乳首を搾るたびに  
白い液体が娘の口中へ  
飛び込みます。

んっ...

(…な、なんだかイケないことを  
してるみたい…♥)

ママさんは少しドキドキしました。

ギューウツッ

ビュッ♥  
ビュカーッ♥

んぐ♥



(んっ… 甘い♡)

歌恋ちゃんは思わずため息。

ママの母乳は  
牛乳より薄い甘さ  
ですが、とろみが  
あり、なんとも  
言えない  
おいしさ。

飲むと不思議に  
体の奥がじわり  
と疼くのです。



「あっ…歌恋ちゃん？」  
「もっ、もう一度飲ませて♡  
もう一度だけ、ねっ?…」

娘は母親の乳首にむしゃぶり  
つき、本格的に吸い始めました。





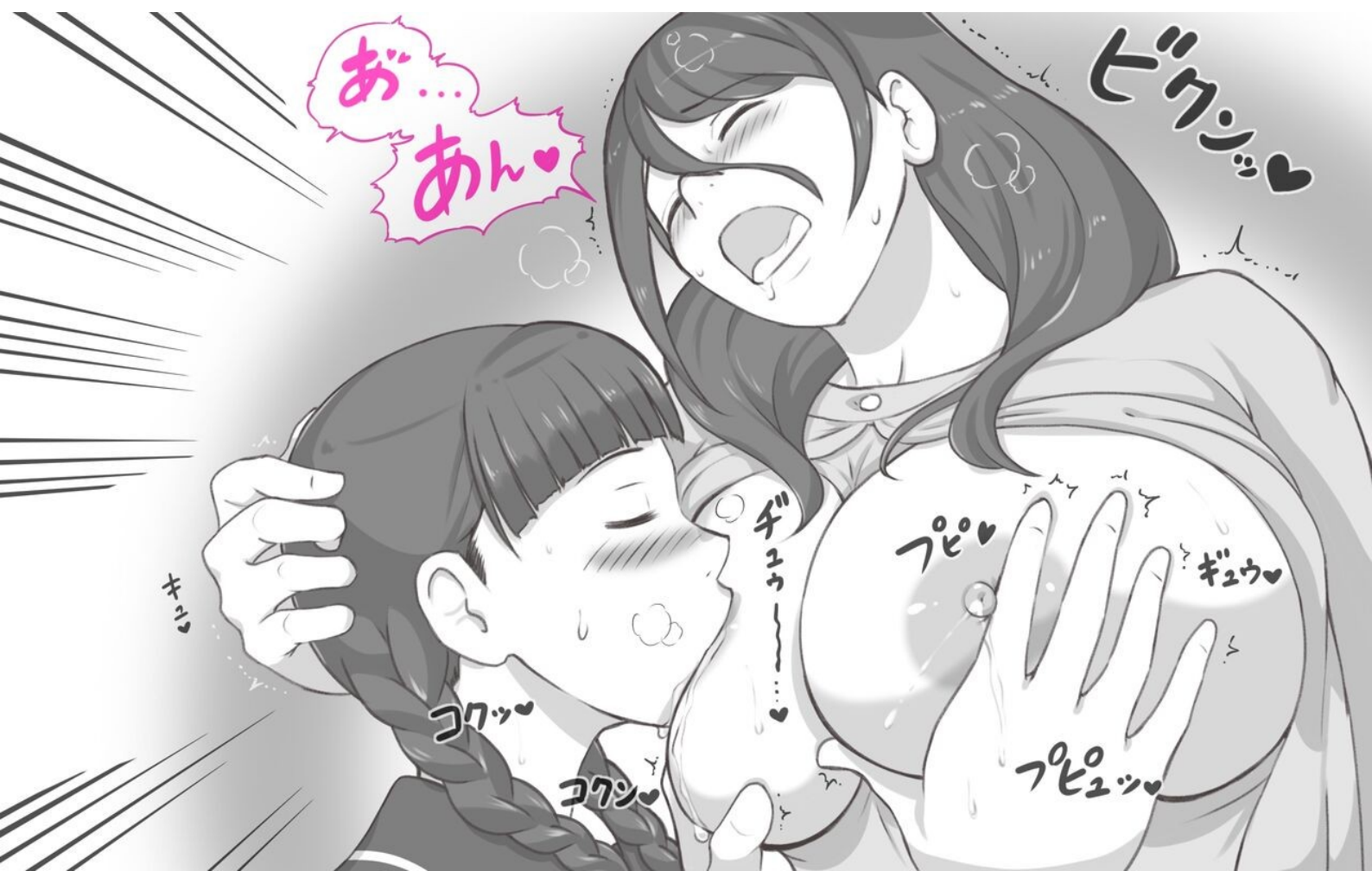


歌音さんの息づかいは少しずつ  
荒くなってゆきました。  
歌恋ちゃんから乳首を吸われる  
たびに、ジンジンとそこが  
痺れるのです。

(んくっ… まさか娘にオツパイを  
吸われて感じちゃうなんて…っ♡)

でも体は正直…。  
もう長い間他人に吸われた  
ことのなかった乳首は  
思った以上に敏感に  
なっていました。

娘の方も次第に熱中してきて、  
ごく自然に乳首に指を掛け  
乳液を搾り取ろうと  
無意識にまさぐる  
のでした♡



「はぁ… はぁ…」  
(変な声出ちゃった…)

乳首を強く吸われ  
思わず軽いアクメに  
襲われてしまった  
歌音さん。

娘に淫らな声を聞かれ  
羞恥に頬を染めます。

けれども歌恋ちゃんは  
しごくご満悦。  
母親の母乳を十数年  
ぶりに堪能し、とても  
満足そうでした。

「美味しかった、ママのオツパイ…♥  
沢山飲ませてくれてありがとう」  
「そ、そうなの？ それならよかったわ」

娘に吸われたせいか  
あれだけダダ漏れした  
母乳はすっかり止まって  
いました。

(お乳が軽くなったわ。  
やっぱり子供に  
吸われる方が  
いいのかしら…?)





—— さてその翌日。

「…えっ、またお乳を吸いたいのか？」

「うん。あのね、昨日のオッパイが美味しかったから…」

顔を赤らめながら  
おねだりする歌恋ちゃん。

(牛乳じゃないのだけど…)

とはいえ、今日もお乳が止まらない歌音さん。

乳房がパンパンに張って痛いので、いつでも搾乳できるように昔使っていた授乳服を引っ張り出したほどです。

娘の申し出はむしろありがたいのですが…

ワクワク♡

(ちょっと恥ずかしいかな…)

いくら相手が実の娘でも、オッパイを吸われるのはさすがに気が引けます。

(それに…昨日はちょっと感じちゃったし)

まさか乳首を吸われてアクメに達するとは…♡  
とはいえ、このままだと乳房の痛みはなくなりません。

「じゃあ…ちょっとだけね♡」

とまどいながら歌音さんは服の前を開きました。





「ん、うんっ…♡」

娘の唇が触れた瞬間、歌音さんは微かに震えました。

乳首を愛撫される感触に、抵抗できない快感を感じてしまったのです♡

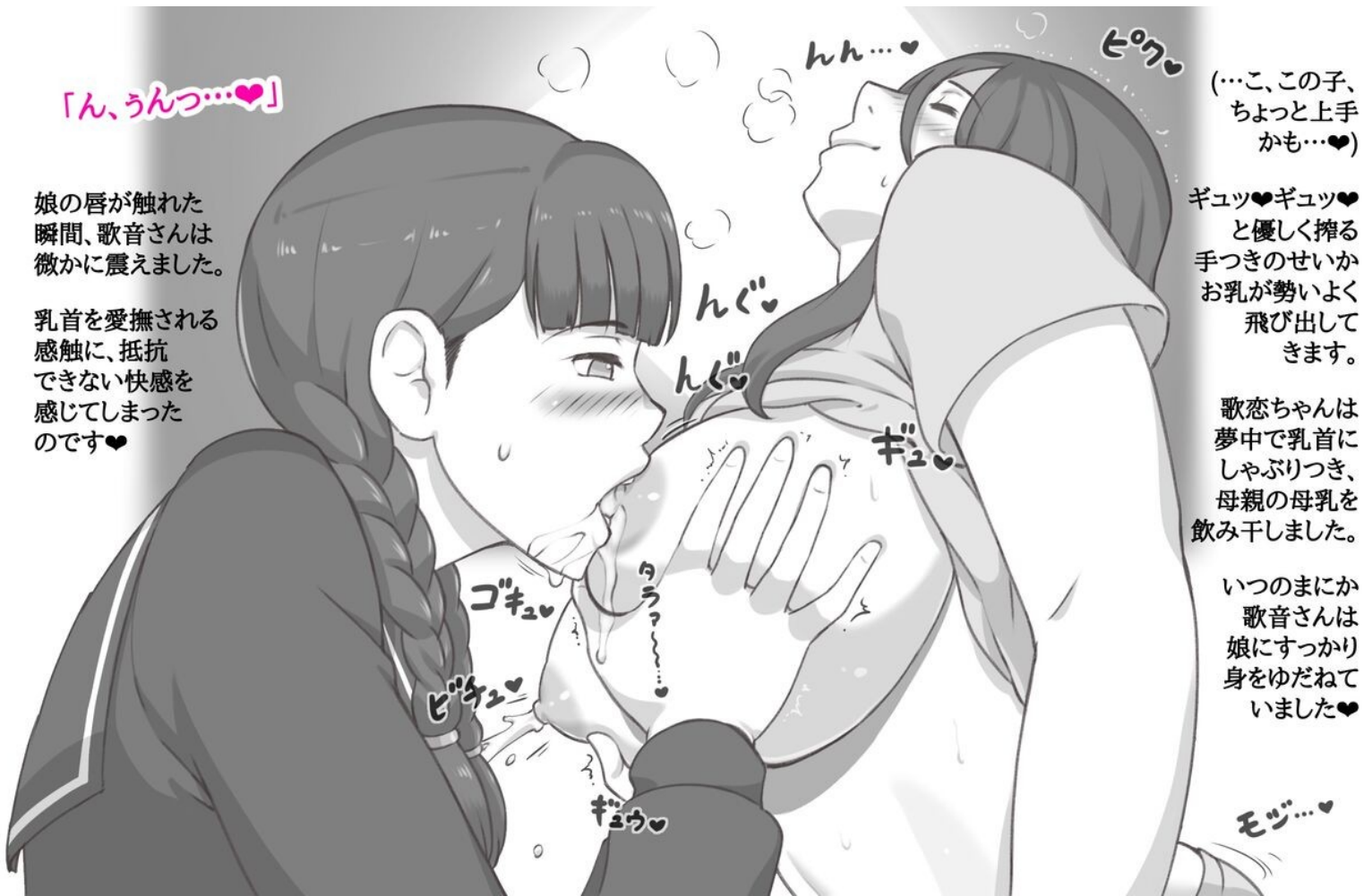
(…こ、この子、ちょっと上手かも…♡)

ギュッ♡ギュッ♡と優しく搾る手つきのせいかお乳が勢いよく飛び出します。

歌恋ちゃんは夢中で乳首にしゃぶりつき、母親の母乳を飲み干しました。

いつのまにか歌音さんは娘にすっかり身をゆだねていました♡

もっ…♡



「あん……♡ んう……♡」

(だ、ダメ……っ。娘に聞こえちゃう……っ)  
次第に昂ぶってくる快感に、  
歌音さんは必死で声を殺そうと  
しました。  
ただ授乳しているだけなのに、  
乳首を吸い上げられるたびに  
ピリッ♡ピリッ♡と  
小さな電流が走る  
のです。

それでも唇の  
隙間から微かな  
喘ぎ声が  
漏れてしまう  
のです♡

…そんな母親の様子を  
娘の歌恋ちゃんが  
ジッと見ている。

(…ママの顔  
色っばい…  
ビクッ♡ 可愛い……♡)

歌音さんの  
上気した顔を眺め、  
口中に含んだ乳首を  
舌で舐め回し、  
いつそう強く吸うのです♡



(!ああ、イっちゃう  
逝っちゃうイ…ク♡)

内側からの衝動に  
突き動かされ、  
歌音さんはとうとう  
絶頂に達して  
しまいました♡

ズチュウウッ♡  
んん♡  
ん…くうん♡  
かな♡  
フツッ♡

(うそ…っ。お乳を吸われてイクなんて…♡)

スウェットパンツの中のパンティは  
グチャグチャに濡れていました。  
いつの間にか股間の割れ目が開き、  
愛液が漏れていたのです。

ビクソッ♡

ビクソッ♡

ガク

ギョウッ♡

ミミミ♡

「うふふ…ママ、可愛かったよ♡ また飲ませてね♡」

「は…い♡」

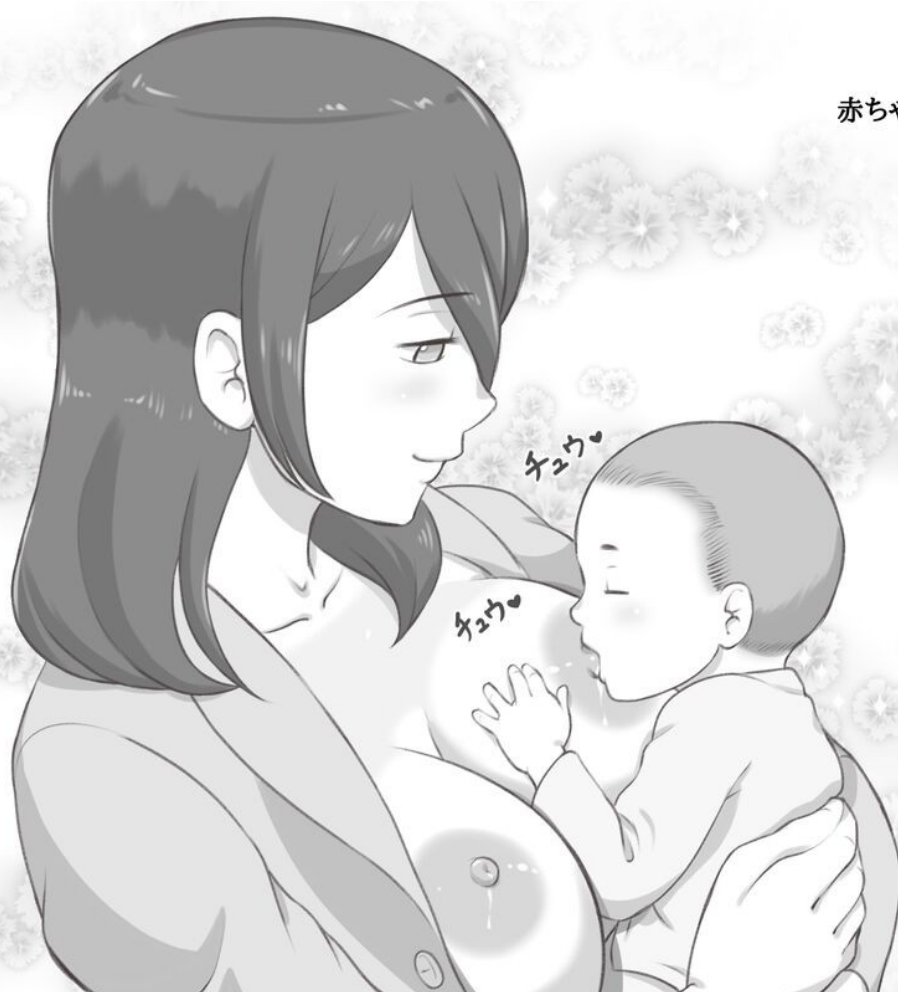
ママさんはもうすっかり娘の言いなりです♡

赤ちゃんだった頃の歌恋ちゃんは  
それはもう天使のように  
可愛い子でした。

元気に自分の母乳を飲む  
我が子を見ていると  
シングルマザーの  
辛さも忘れて  
しまいます。

「いっぱい飲んで、  
大きくなってね…♡」

赤ちゃんをあやしながら  
そう呟くママさん。





歌音さんの願いどおり、娘の歌恋ちゃんは  
健やかに成長しました。

ふたりは姉妹のように  
仲良しです♥



歌音さんは娘可愛さのあまり、強く叱ったことは  
一度もありませんでしたが、歌恋ちゃんは  
そんな母親の人のよさにつけ込むこともなく、  
反抗期もないまま、ママ一途でした。





そして、毎日自分の乳を吸ってくれる娘のことを自然に思い浮かべてしまうのです。

自分が実の娘に欲情していることを知り、ショックを覚えます。けれども指は一向に止まりません。

「ご、ごんなさい歌恋ちゃん…イケないママを許して…っ♡」

(あ…んう♡ 歌恋ちゃ…ん)

娘を学校へ送り出すと、歌音さんはいつものように搾乳を始めようとしたのですが、体の奥の疼きに耐え切れずオナニーを始めてしまいました♡

この頃は乳房に触れるだけで昂ぶってしまうのです。

(変だわ…こんなに…感じちゃうなんて…っ♡)

「ああ…歌恋♡」

はあっ♡

はあ♡

はあっ♡

かれ…ん♡

ん♡

グニッグニユ♡

シッポ♡

ズタッ♡

ジュー♡

フチ♡

ピクン♡

イ

ん

謝りながら膣穴深く指を突き入れ、なまめかしい声を上げるのです…♡

ギッッ…

一方、歌恋ちゃんにとって  
母親の歌音さんは、  
肉親であると同時に  
憧れの存在でも  
ありました。

物心ついた時から  
母子家庭だったので  
父親がいなくても  
特に寂しいと思わず、  
歌恋ちゃんは  
歌音さんというだけで  
満足していました。

たまにイタズラしても  
気の弱い歌音さんは  
娘を叱ることが  
できません。

母親があまりにも  
優しいので、かえって  
歌恋ちゃんは反抗  
できませんでした。

のみならず、同性として見ても  
その可愛い容姿と  
豊満な肉体は  
まさに理想の女性でした。

母親を崇拜するあまり、  
歌恋ちゃんは異性に  
興味を持たない  
自分に気づいて  
いません。

なんとなく、  
いつかは恋に落ちて  
誰かと結婚する  
のだろうな…  
とは思って  
いました。

ところが…



「こちらですね」  
「ありがとう」  
(…あら？この人…)  
「…ママ、どうしたの？」

「ううん、ちょっとね。智恵ちゃん、  
もしかすると近いうちにお友だちが  
出来るかもよ」  
「えっ？」  
「そう、そうなの…うふふ♡」  
「？」



「はあ… はあ… ママア…♡」

学校のトイレで歌恋ちゃんはオナニーに  
ふけっていました♡  
母乳を飲むようになってからというもの、  
なぜか母親の乳房を思い出すだけで  
異常に昂ぶるのです。

(どうしてこんな…っ。  
ああ…でももっと  
ママのオッパイ飲め  
たい…乳首しゃぶり  
たい…ママの  
恥ずかしがる顔  
見たい…♡)

ん♡ は…♡

あ…あ♡

…そして、服の下に隠された  
女体を想像するだけで、  
もっと違うことがしたい衝動に  
駆られるのです。

は、は、♡

(ママごめんねっ、  
こんな想像して…  
でも…あつ、イクっ♡  
ママのアレを  
想いながら  
イッちゃうう♡♡♡)

がっ





「汚れちゃうから」という理由で  
歌恋ちゃんは制服を脱ぎ、  
パンティだけの姿になりました。

まだ発展途上の薄い胸と  
細っそりした肢体があらわに  
なります。

そして母親へ覆い被さると  
本格的に責めてきました♡

歌音さんは娘にされるがまま…

大きな乳房をチュウチュウ無心に  
吸う歌恋ちゃんを見ていると  
あらためて我が子への愛しさが  
込み上げてくるのです♡





はあ♡  
はあ♡

歌恋ちゃんは  
ありとあらゆる  
テクニックを  
仕掛けて  
きました♡

あうん...♡  
い、痛いのに  
気持ちいい...♡

ハミッ♡

キューッ♡

グッ♡  
グッ♡  
グニユリ♡

あっ♡あっ♡  
あっ♡あっ♡

チュウ♡  
ギョウ♡

ギョ♡

ムムムム...  
ビュッ♡  
ビュッ♡  
ビュッ♡

ゴク♡  
ゴク♡

オッパイでママさんを  
イカせたい一心で  
乳首をなぶり  
歌音さんを翻弄したのです♡

ロロ♡  
ロロ♡

ネチョオ...♡

ビクン♡

キューウ...♡



「ママもお乳で服が汚れちゃうから、  
脱ぎ脱ぎしようねっ…♥」

「あっ…か、歌恋ちゃん」

娘が歌音さんの授乳服と  
スウェットパンツを脱がせます。  
散々舐め回されて体の力が  
抜けた母親は抵抗でき  
ませんでした。

「うふふっ♪ やっぱ感じてたんだ〜♥」

歌音さんのパンティは隠しようもないほど  
股間がしとどに濡れていました♥  
(もっとも、歌恋ちゃんのパンティも  
同じくらい濡れ濡れです♥)

「歌恋ちゃん…ママ、恥ずかしい…♥」

羞恥に頬を染める母親に、実の娘は  
ゾクゾクするような悦びを  
感じました。

「知ってたよ、ママ。大丈夫、  
わたしに任せて…♥」





「…うわ、ここ、グチヨグチヨ  
だよ♡ どうしてこんなに  
濡れてるの…?」

「うふふっ、ママってエッチだねっ♡ そんなママが大好きだよ♡  
もっとエッチな声聴かせて…ねっ?♡」

「も、もう…  
歌恋ちゃんの  
イジワル…っ♡」

娘に言葉責めされ、  
歌音さんは  
いたたまれないほどの  
恥ずかしさを覚えました。  
そして、ちょっぴりMっ気のある  
彼女はゾクゾクするような喜びを  
感じてしまったのです♡

そんなふうに使われた歌音さんは、  
もうこれ以上自分を抑えることが  
できませんでした。  
とうとうあられもない声を上げ、  
娘におねだりしていたのです。

「…お、お願い歌恋ちゃん♡ もっとアソコをいじって♡  
ママを気持ちよくさせてえ♡♡」





「♡ちゅっ、んん…ちゅう♡ ママ…好きだよ…♡」

うわ言のように呟きながら、歌恋ちゃんはいつも手を休めず  
歌音さんを愛撫し続けました♡

娘を産んだ膣道は濡れまくり、  
指で掘削されるたびに  
ギュウッ♡と挟みつけます。  
その力強さに、歌恋ちゃんは  
驚きました。

(ママのオマンコ、すごく熱い…♡  
ヤケドしちゃいそう♡)

歌音さんは娘の手マンで  
数え切れないほどの  
アクメを感じたのです♡

「あぁ…歌恋ちゃん…  
わたしも好きよ…♡」









「んんっ…ママん♥」

「んふっ…歌恋ちゃん♥」

歌音さんがイッた後、  
長い余韻から醒めると、  
ふたりは自然に唇を  
重ねていました。  
歌恋ちゃんにとって  
ファーストキッス…♥



お互いの裸を見せ合い、  
存分に痴態を晒した後、  
もうふたりがためらう理由は  
ありませんでした。

「これからも、いっぱい  
いっぱいオッパイも  
オマンコも吸ってあげる♥  
大好きよ、ママ。愛してる…♥」

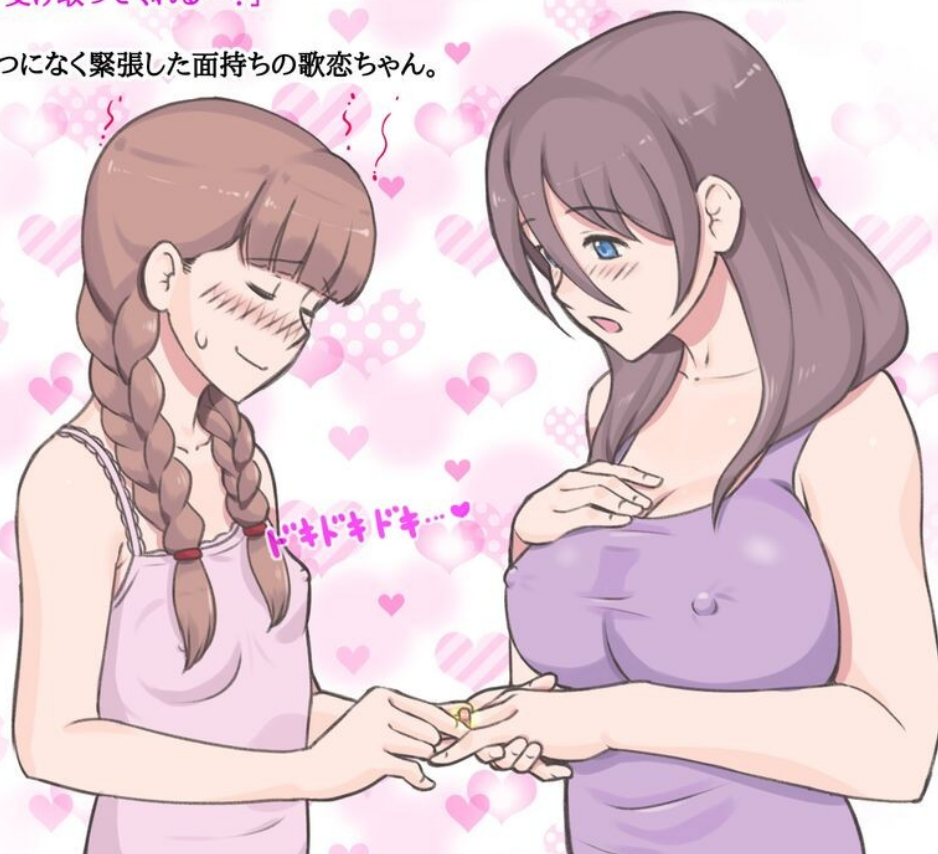
「わたしも愛してるわ、  
歌恋ちゃん…♥  
ママの体はあなたのものよ♥  
たくさん愛して、ねっ…♥」

「ママ。誕生日プレゼントなんだけど…  
う、受け取ってくれる…?」

「あらあら、今年は何をくれるの?  
…まあ!？」

いつになく緊張した面持ちの歌恋ちゃん。

娘から贈られたのは、お揃いの指輪。  
ピンクゴールドに輝くシンプルな物です。  
その意味は「運命の絆・幸福・夫婦愛」…♥



歌音さんは、娘の気持ちが胸に沁みました。  
嵌めてみると、あつらえたようにピッタリ♥

「ありがとう♥あなただと思って大切にするわ」  
「…よかった!受け取ってくれて  
ありがとう、ママ♥」

お揃いの指輪にしてから  
母と娘の仲はますます  
親密になりました♥

以前にも増して  
ふたりで過ごす  
時間が多くなり、  
休日はデートに  
出掛けることも  
珍しくありません。

それは仲の良い  
母娘というより、  
親密な姉妹…  
もつとはっきり  
言えば恋人同士  
のようです♥

握り合う掌から自然と  
愛情が伝わり…

見つめ合う瞳は  
時に淫らな色を帯びるのです♥

相変わらずお乳の張る  
歌音さんですが、  
もはや彼女は胸を治したいとは  
思いませんでした。

(この子が喜ぶ限り、  
もっともつと母乳を  
与えたい…  
わたしのお乳を飲んで  
気持ちよくして欲しい…♥  
わたしには歌恋が  
必要なんだわ…♥)

(もっとママのオツパイ飲みたい…♥  
いっぱい飲んでママをイカせたい♥  
わたしの前で可愛く喘いで欲しい♥  
エッチなママが大好き…♥  
ママがいれば恋人なんていない♥)





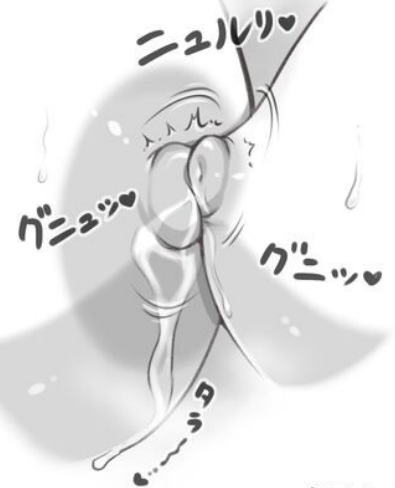
「♡はあ…はあ…  
歌恋ちゃん…♡」

「♡んっ…ママ  
…あ♡」

ふたりの淫らな  
性活は毎日  
続いています♡

いまでは母娘セックス  
なしでは一日も  
いられません。

母乳のしたたる乳首を  
擦り合い、  
舌と舌を合わせて  
唾液を交換し…



女同士でできる  
あらゆる行為を楽しんでいます♡  
いつの間にかベッドもひとつになり、  
朝から晩までレズ行為にふけるのでした♡





「ああ… マ、ママア…♡」

「歌恋ちゃんも気持ちよくなりましょう、ね…♡」

オマンコに口づけされ、歌恋ちゃんは喘ぎました♡  
生まれて初めて誰かにクンニされたのです。  
そのお相手は、自分の母親…♡♡

優しい舌使いに  
震えながら、  
歌恋ちゃんの  
小さな胸は  
歌音さんへの  
愛しさで  
溢れそう  
…♡

「ママ、もっと  
舐めて…♡  
歌恋を  
可愛がって  
…♡♡♡」

ツワァ…♡

「んっ…ズズツ♡ ママのオマンコお汁おいしい…♡」

「ぬるぺちよっ…♡ 歌恋ちゃんのオマンコもとっても美味しいわ…んっ♡んっ♡」

初めて舐める娘の股間に歌音さんはすっかり夢中♥  
 実の娘をクニニするという背徳感もあり  
 震えるほど興奮しています♥

(なんてきれいで可愛い  
オマンコなの…♡  
もっと気持ちよく  
なって、歌恋  
ちゃん♡)

「あんっ♡…そ、そんなに  
舐めたら歌恋イツちゃう♡  
逝くっ♡イクツ♡いくううう♡」

かわいい♡  
かわいい♡  
かわいい♡





「…んぐっ♡んぐっ♡  
ママオッパイおいしい  
…っ♡♡♡♡」

母乳を浴びながら歌恋ちゃんは  
うっとりしました…♡  
華奢な体は乳液にまみれ、  
恍惚に震えています♡  
そんな娘を見ている  
だけで、歌音さんは  
アクメへ逝って  
しまいそう…♡

一日中  
レズセックスに  
ふけり、痴態の限りを  
尽くし、お互いの欲情に  
満ちた肉体を堪能した後で、  
もはやふたりは母娘の一線を  
越えていました。

実の母娘は、もう本物の恋人同士です♡



「ママ、一生のお願いがあるのっ!!」

ある日、いつになく真剣な顔で  
歌恋ちゃんと言いました。

「お願い…って何かしら？」  
「あのね、あの… も、もう  
誰とも再婚しないで  
欲しいのっ!!」  
「え… ええ!？」

目をパチクリする歌音さんの  
前で、歌恋ちゃんは、  
いつまでも母親のそばに  
いたいこと、ふたり  
だけで暮らしたい  
こと、そしてなにより  
母親のオツパイを  
飲んでいいのは  
自分だけである  
ことを切々と  
訴えたのです。

「わ、わたしがママを幸せにするからっ♡

エッチなことだっ  
て絶対満足させるっ♡

だから一生  
わたしと一緒に  
いてっ♡」

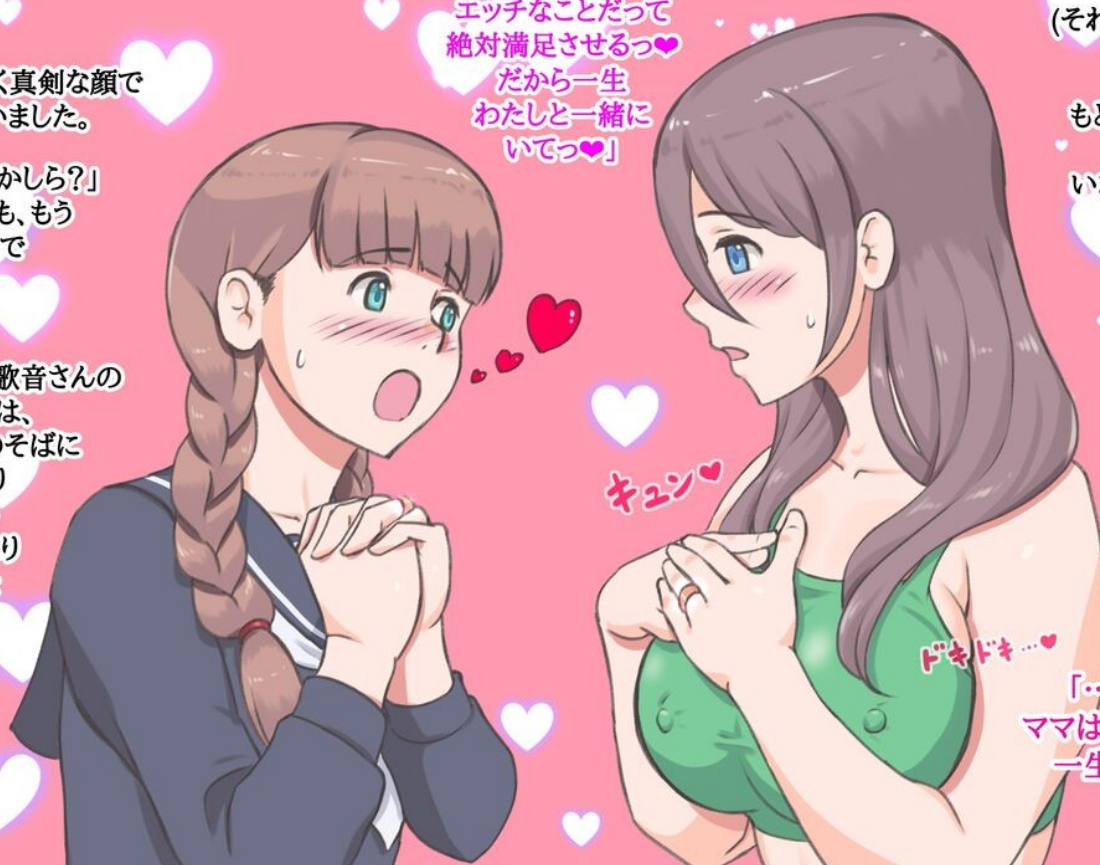
(それってプロポーズ  
なんじゃ…)

もとより再婚なんて  
ちっとも考えて  
いませんでしたが、  
娘のあまりにも  
真剣な態度に  
(もう、この子と  
一生添い遂げる  
しかない…)  
母親である  
自分を選んで  
くれた娘に  
胸が痛くなる  
ほど一途な  
愛情を感じ  
たのでした。

キュー♡

ドキドキ…♡

「…わかりました。  
ママは、歌恋ちゃんと  
一生一緒にいます  
…♡♡♡♡」





ふたりは夢のようなキスをしました。





「ぢゃーん! ママのために  
用意してみたよ♥ どお?」

「!? まあ…そんな  
モノまで?」

初めてペニバンを見た  
歌音さんはビックリ♥

「んっ、んっ…ね、ねえママ、どお?  
わたしのオチンチン  
気持ちいい?」

「あんっ♥ あっ♥ ん♥  
な、なんだか変な  
気持ち…♥」

娘のぎこちない抽送に、とまどいながらも  
自然と腰を振る歌音さん♥  
歌恋ちゃんも次第に慣れてきて  
巧みにママさんを責めたます♥

(セックスで  
満足させるって  
本気だったのね…  
うれしい♥♥)

オ…  
オチンチン  
いい♥  
歌恋ちゃんの  
オチンポいい♥



「はあ…はあ… ママは、ずっと  
わたしのものだから…ね♡」

あれから毎日、歌恋ちゃんはペニバンで  
母親を責め続けています♡  
最初はたどたどしい動きでしたが、  
今ではすっかりテクニシャン。  
ママが喜ぶ箇所を  
知り尽くして  
います♡

「はい…ママは、  
歌恋ちゃんの  
ものです…っ♡」

娘に征服される  
快感に目覚めて  
しまった歌音さん。

今では自分からおねだりするほど♡

ふたりは毎晩体を重ね、母娘セックスに  
没頭していました。もちろん母乳を  
搾るのも忘れません♡  
射精がないぶん限度のないペニバンは  
何時間でも母親を犯せます♡

歌音さんは数え切れない  
ほど絶頂し、歓喜に  
身を震わせる  
のでした♡

「歌恋ちゃん、もっと  
ママを突いて…♡  
もっと…もっと…  
もっとお♡♡♡」













そして、やすらぎの時間が訪れます。

ふたりの体の奥に激しく愛し合った余韻を残しながら…

(こんなに穏やかな想いがあったなんて…)

歌音さんは娘の静かな寝息を聴きながら  
深い満足感にひたっていました。

(まるでこの子を産む前から

決まっていたみたい…

うん、きっとそう)

生まれて初めて心も身体も満たされ、  
母親は実の娘と愛し合うことが自然で  
あるように感じられたのです。

『おやすみなさい、愛しい子…♡』





「…え、『娘さんの子供を産みたい』？」

産婦人科の女医は  
キョトンとしました。  
そんな事をお願い  
されるのは  
初めてです。

「あの、噂で聞いたのですが、  
先生は女同士で子供を作る  
研究をされているとか…」

「…あ〜、アレですか。  
いや、あれはまだ実験段階  
で…」

すると今度は歌恋ちゃんが  
「お願いします！  
わたし、ママの子が欲しい  
んです！」  
真剣な顔で言うのです。

「私たち結婚したんですけど、  
将来のことを考えると、娘に  
子供を残しておきたいくて…♥」

(ふうむ。どうやら本気の  
ようだね。そろそろ  
始める時期か)  
「…わかりました。  
上手くいくか  
どうか未知数  
ですが、全力を  
尽くしましょう」





女同士で子供を作るには  
クリトリスを肥大化して  
クリペニスにする！

本舗初の野心的  
プロジェクトです。  
心の準備は  
いいですか？

う〜ん  
生やすのか〜

は  
〜  
…

つづく？

